

学年進行時の学級数増減に伴う学級規模の変化と その影響に関する調査研究（第Ⅲ報）

渡 部 昭 男*

A research on the effects of the radical change of elementary school class sizes,
in one prefecture in Japan, during the academic year 1999 – 2000

WATANABE, Akio

キーワード：学級編制（成）、学級規模、40人学級、30人学級、自治体調査研究

1. 目 的

1980年改正標準法「公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律」（～1991年度の12年計画）により日本の公立小・中学校は40人以下の学級編制となったが、1993年改正標準法（～2000年度の8年計画）に引き続き、2001年改正標準法（～2005年度の5年計画）でも学級編制のさらなる少人数化は見送られている。40人学級編制の下、在籍児童・生徒数が「40の倍数」人前後の学年では、わずかに数名の異動によって学級数に増減が生じ、学級規模に大きな変化が生じる。例えば、41人2学級（1学級各20人・21人）の学年が1人の転出によって40人1学級となったり、その逆もある。こうした大きな変化を追うことによって、同一の児童・生徒集団が学年進行に伴って学級規模の縮小（20人台規模へ）・拡大（約40人規模へ）に遭遇した際の効果・影響を経年的に把握することができる。

「学年進行時の学級数増減に伴う学級規模の変化とその影響」に関して、1997→1998年度、並びに1998→1999年度の調査研究については第Ⅰ・Ⅱ報として既に公表した⁽¹⁾。本稿では、さらに1999→2000年度の調査に関して報告する。

2. 方 法

対象県として、第Ⅰ・Ⅱ報と同様にT県を選んだ。学校基本調査を各学校の学年別に掲載したT県教育委員会編『学校便覧』（各5月1日現在）の1999及び2000年度版に基づき、1999→2000年度の学年進行過程で在籍児童生徒数（75条学級在籍者は外数扱いとなっている）に変化があり、40人学級編制にかかわって学級増減のあった学年・学校を抽出した。

*人間教育講座（特別なニーズ教育）akiowtnb@fed.tottori-u.ac.jp

その結果、表1に示すようにT県下の公立小学校（分校を除く）168校の中で、学級増が12校（7.1%）・学級減が5校（3.0%）あった（なお、対象数が少なかった中学校は、今回も除外した）。対象小学校17校について調査用紙（第Ⅱ報の巻末に掲載）を各学校長宛に郵送し、該当学年の担任（できれば持ち上がり担任）に回答を依頼した。調査時期は、これまでと同様に、学級づくり等が進んで学年の様子をある程度客観的に見ることのできる3学期を選び、2001年1月とした。

回収状況は、学級増が10/12校（83.3%）・学級減が4/5校（80.0%）であった（表1）。

表1. 調査対象小学校及び回収状況 回答校数/対象校数（単位：校）

学 年	2学年	3学年	4学年	5学年	6学年	計
学級増	1 / 1	4 / 4	3 / 4	2 / 2	— / 1	10 / 12
学級減	— / —	1 / 1	1 / 1	1 / 1	1 / 2	4 / 5

3. 結 果

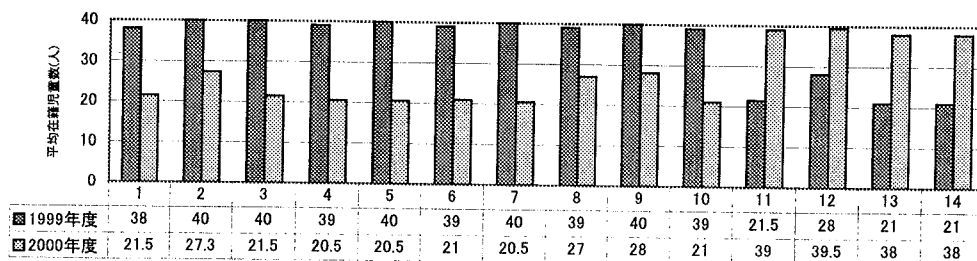
1) 学級増減による学級規模の変化（設問A「学級増減状況」）

回答のあった14校における学級増減による学級規模の変化は、以下のものである（図1）。

まず、学級増加となった10校（学校No.1～10）は、1999年度の38～40人（平均値：10校の在籍児童数計/学級数計＝39.5人）から2000年度の20.5～28人（同23.5人）へと約3/5（平均値による縮小率59%）に学級規模が縮小していた。学級増加となった在籍児童数の変化は、1人増が2校（No.5・7）、2人増が2校（No.2・4）、3人増が4校（No.3・6・8・10）、4人増が1校（No.9）、5人増が1校（No.1）であった。また、1→2学級が7校（No.1・3・4・5・6・7・10）、2→3学級が3校（No.2・8・9）であった。

次に、学級減少となった4校（No.11～14）は、1999年度の21～28人（平均値：4校の在籍児童数計/学級数計＝23.4人）から2000年度の38～39.5人（同38.8人）へと約1.7倍（平均値による拡大率166%）に学級規模が拡大していた。学級減少となった在籍児童数の変化は、4人減が3校（No.11・13・14）、5人減が1校（No.12）であった。また、2→1学級が3校（No.11・13・14）、3→2学級が1校（No.12）であった。

図1. 学級増減による学級規模の変化(1999/2000)



2) 学級規模の変化に伴う影響 (設問 B + 設問 A「学年担任状況」)

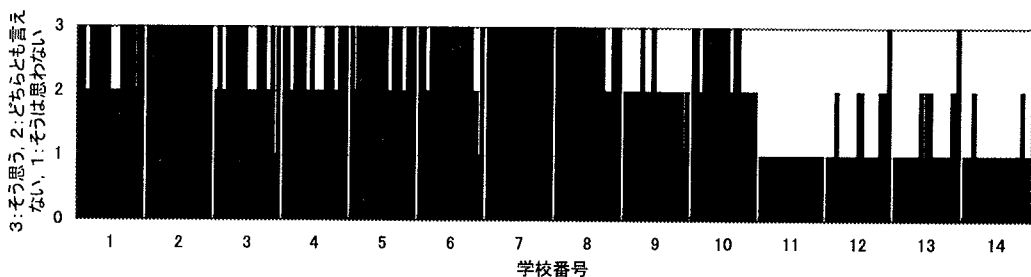
(i) 23項目に対する3段階選択回答

学級規模の変化に伴う影響に関する以下の23項目(第I・II報までの22項目に加えて「学級崩壊」にかかわる項目を追加)について、1999年度と比較しての2000年度のクラスの様子を3段階選択(そう思う・3点, どちらとも言えない・2点, そうは思わない・1点)で回答してもらった。

- (1) 授業中の子ども一人あたりの発言回数が多くなった。
- (2) 授業に集中している子どもが増えた。
- (3) 授業中に自分の意見を積極的に述べる子どもが増えた。
- (4) 授業中に子ども同士の議論が成り立ちやすくなった。
- (5) 学習の過程でつまづいている子どもを見つけやすくなった。
- (6) 一人一人の良さを生かした指導ができるようになった。
- (7) テストの採点やノートの点検に時間がかけられるようになった。
- (8) 授業以外で子どもとの会話が十分できるようになった。
- (9) 子ども同士の人間関係が分かりやすくなった。
- (10) 子ども一人一人の気持ちが理解できるようになった。
- (11) 教室が広くなった。
- (12) イライラしている子どもが減った。
- (13) 学級に和やかな雰囲気が出てきた。
- (14) 学級にまとまりが出てきた。
- (15) 保護者とのコミュニケーションが増えた。
- (16) 基礎学力の定着を進めることができるようになった。
- (17) 繰り返して教える等、分かるまで教えられるようになった。
- (18) 授業中に習熟の時間を確保することができるようになった。
- (19) 発展させたり応用する力をつける授業ができるようになった。
- (20) 考える力や生きる力をつける授業ができるようになった。
- (21) 学級の中に「いじめ」は見られない。
- (22) 学級の中に「不登校」の子どもはいない。
- (23) 学級の中に「学級崩壊」(授業不成立)の兆候は見られない。

結果は、視覚的に捉え易いように図2に示すとともに、表2に一覧にし、学級増加=規模縮小校(10校)と学級減少=規模拡大校(4校)の別に得点の平均値を求めた。なお今回は、二群の一方の

図2. 学級規模の変化に伴う影響(1999/2000)



サンプル数が5未満となったので、マン・ホイットニ検定 (Mann-Whitney's U Test) は行わなかった。加えて参考のために、設問A「学年担任状況」欄への記述、及びT県教育調査研究協会『T県教育関係職員録』1999年度・2000年度版の比較により判明した人事異動状況から、各校回答者の2000年度における該当学年及び担任の持ち上がり状況(持ち上がりの担任-○、校内での異動による担任-△、校外からの異動による担任-X)も表示した。学級増加=規模縮小校は、前年度の様子を知っている持ち上がり担任が3校であり、校内異動担任が6校、校外異動担任が1校であった。学級減少=規模拡大校は持ち上がり担任が2校、校内異動担任が2校であった。

表2. 学級規模の変化に伴う影響(1999/2000)

区 分 学 校 番 号	学級増加=規模縮小校										平均	学級減少=規模拡大校				平均
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10		11	12	13	14	
2000年度学年 持ち上がり担任	2	3	3	3	3	4	4	4	5	5	3	4	5	6		
	○	△	△	×	△	○	△	○	△	△	△	○	△	○		
01) 発言回数が増加	3	3	2	3	3	3	3	3	2	3	2.8	1	1	1	1	1.0
02) 授業に集中	3	3	3	3	2	3	3	3	2	3	2.8	1	1	1	1	1.0
03) 意見を述べる	2	3	2	2	3	2	3	2	2	2	2.3	1	1	1	1	1.0
04) 議論が成立	2	3	2	2	2	2	3	3	2	2	2.3	1	2	1	2	1.5
05) つまずきの発見	3	3	3	3	3	3	3	3	2	3	2.9	1	1	1	1	1.0
06) 個々の良さ	3	3	3	3	3	3	3	2	2	3	2.8	1	1	1	1	1.0
07) 採点や点検	3	3	3	3	3	3	3	3	3	2	2.9	1	1	1	1	1.0
08) 子どもとの会話	3	3	3	3	3	3	3	3	2	3	2.9	1	1	1	1	1.0
09) 人間関係の把握	3	3	3	2	3	3	3	3	2	3	2.8	1	1	1	1	1.0
10) 気持ちの理解	3	3	3	2	3	3	3	2	2	3	2.7	1	1	2	1	1.3
11) 教室が広く感じる	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3.0	1	1	1	1	1.0
12) イライラ児の減少	2	3	2	2	3	3	3	3	2	3	2.6	1	2	2	1	1.5
13) 和やかな雰囲気	2	3	2	2	3	3	3	3	2	3	2.6	1	2	2	1	1.5
14) 学級にまとまり	2	3	2	2	2	3	3	3	2	2	2.4	1	1	1	1	1.0
15) 保護者との関係	1	3	2	1	2	1	3	2	2	2	1.9	1	1	1	1	1.0
16) 基礎学力の定着	3	3	3	3	3	3	3	3	2	3	2.9	1	1	1	1	1.0
17) 分かるまで指導	3	3	3	3	3	3	3	3	2	3	2.9	1	1	1	1	1.0
18) 習熟時間の確保	3	3	3	3	3	3	3	2	2	2	2.7	1	1	1	1	1.0
19) 発展・応用の力	3	3	2	2	2	3	3	2	2	2	2.4	1	1	1	1	1.0
20) 考え生きる力	3	3	2	2	2	2	3	2	2	2	2.3	1	2	1	1	1.3
21) 「いじめ」はない	2	3	3	3	3	2	3	3	2	1	2.5	1	2	2	2	1.8
22) 「不登校」はない	3	3	1	3	3	1	3	3	1	2	2.3	1	2	2	1	1.5
23) 学級崩壊の兆候なし	3	3	3	3	3	3	3	3	2	2	2.8	1	3	3	1	2.0

注1) 3:そう思う,2:どちらとも言えない,1:そうは思わない。

平均値に関して、学級増加=規模縮小校の10校では1.9～3.0となっており、(19)保護者との関係[平均値1.9]を除く22項目で2.3以上と全般的に肯定的な影響がみられた。一方、学級減少=規模拡大校の4校では1.0～2.0となっており、(23)学級崩壊の兆候なし[2.0]を除く22項目で1.8以下と全般的に否定的な影響がみられた。

(ii) 自由記述—子どもへの影響

学級規模の変化が及ぼす①子どもへの影響、②担任教師の学級経営への影響、③学年担任団の学年経営への影響について自由記述を求めた(設問B・自由記述)。

まず、子どもへの影響に関して、学級増加=規模縮小校では、「2学級となった当初は、教師の目・声かけが子ども一人一人に増加したので、多くの子どもがとまどいを感じていたようである。しかし、少人数になれてくると、自由な雰囲気があふれ、生き生きと生活するようになった。給食など

の準備にかかる時間も少なくなり、ゆったりと食事ができるようになり、嫌いなものもがんばって食べようとする姿も見られるようになってきた。2学級ということで、子ども達の中に競争心がうまれ、がんばろうとする意欲につながっている。(学校No.1, 2年生, 持ち上がり)「一人一人が自分を発揮することが十分にできる。(学校No.2, 3年生, 校外異動)」「人数が少ないことによって事務的なこと(集金など)や、採点やノートの点検にかかる時間が短時間になり、その分ゆとりをもって子ども達に接することができるようになる。その結果として子ども一人一人をじっくりと見つめ、その子に応じた対応ができる。／教師の心のゆとりが子ども達の指導に大きく影響すると思う。そのゆとりを生むためにも人数が少ないことは大きく関係している。／計算力、漢字を書く力など、ていねいに指導ができることで定着がよいと思われる。／問題解決学習を行う時など、子どもの課題に応じた支援がしやすい。特に総合的な学習など少人数の方が子どもの要求に応じてやることができる。／学級の中での自分の位置(居場所)が確保され、心の安定を保つことができると感じる。特に下学年では担任に認められることで安定してくるから。(学校No.3, 3年生, 校内異動)」「少人数になった為、一人一人への個別の学習を学習中に行える。(学校No.4, 3年生, 校外異動)」「担任と向き合う時間・回数が増えるので、安心感が増し、自分の存在意識が高まるし、認めてもらっていると受け取り易くなっていると思う。(学校No.5, 3年生, 校内異動)」「子ども達が落ち着いて生活、学習するようになった。一人一人に多くの場面で目が行き届くようになり、たくさん声をかけられるようになった。その分、子ども達は安心して友達と関わったり、学習に集中したりできるようになったと感じている。教室に心の居場所をつくり易くなったと言えるのではないだろうか。／学習量が増えた。例えば理科実験をした時、全員が実験道具を使えるようになった。また、パソコンをしても全員が使うことができた。(学校No.6, 4年生, 持ち上がり)」「1学級から2学級になったことによって、子ども達は互いに違うクラスを意識するようになりよい刺激を与え合うようになった。40人から半数の人数になったことにより、発言する機会が多くなり、自分の意見を言う子どもが増えた。学級内で問題が起きた時、人数が少ない分だけ一人一人が自分の問題として考えるようになった。一人一人に目が届くようになり、基礎学力の定着を図ることができた。(学校No.7, 4年生, 校内異動)」「学級が静かになるという体験を初めて味わうことができ、集中して話を聞いたり、読んだりできるようになった。落ち着いてきた。(昨年度は静かになることがほとんどなかった。)／男女入り混じって遊ぶ姿が見られるようになった。(昨年度は分離していた。)／全員発言する日も珍しくなくなった。／初めのうちは密集していないと不安になる様子も見られたが、2学期に入るあたりから慣れてきたようだ。／全員で役割分担して活動する際、一人一人が自分の分担に責任を持つようになった。(昨年度はともすると何もせずに終わる子どもができてしまっていた。)(学校No.8, 4年生, 持ち上がり)」「落ち着いた雰囲気の中で学習が可能となっているように思う。(学校No.9, 5年生, 校内異動)」「空間的ゆとりが精神的ゆとりにつながり、全体的に落ち着いた雰囲気が出た。学習においては、一人一人により目が届き、つまづきを発見しやすくなったため、より学習理解の助けとなった。(学校No.10, 5年生, 校内異動)」という記述であった。ゆとりや落ち着きが見られることによる学習面の好ましい変化や、子ども同士、担任と子どもたちとの人間関係等に良い影響があった様子がうかがえた。

学級減少＝規模拡大校では、「積極的な子どもにとっては多人数の方が競争心が芽生え、効果的かもしれない。消極的な子どもにとっては、多人数だと益々自分を表現していくことが困難になり、何かと負担になることが多くなってくると思う。また、教室にゆとりがなく、圧迫感を感じてストレスが増してくると思う。(学校No.11, 3年生, 校内異動)」「自分がしなくてもいいと思う子がいる

(数にうもれている)。全員の子が前に立ち認められる場面が作れない。系の活動など、ついつい教員の手助け的な活動になりがち。[一方で,] ([]内は引用者による補足：以下、同様) 多くの個性と出会い、多くの意見が出し合える。(学校No.12, 4年生, 持ち上がり)「積極的な子はよいが、そうでない子は別に自分が言わなくても、やらなくてもという受け身的な姿勢になる。2クラスが1クラスになるので、4月当初は落ち着かない。一人一人の意見を聞こうとすると、1時間では足りない。[一方で,] 今までにない友達の広がりがある。経営がうまくいくと大人数の方が多様な活動へ広げていける。(学校No.13, 5年生, 校内異動)」「子どもにとっては、クラスが分かれていた友達と一緒に学習できるということがあり、うれしそうにしていたこともあった。学習中ににぎやかす子どもが増え、落ち着いて学習できない状況がある。(学校No.14, 6年生, 持ち上がり)」という記述であった。学級規模の拡大に伴う問題点とともに、集団が大きくなったメリットにも言及がみられた。

(iii) 自由記述—学級経営への影響

学級経営への影響に関して、学級増加＝規模縮小校では、「事務的な作業の量が軽減され、その分きめ細かい指導ができるようになった。学力面で中間層にあたる子ども達の実態がよく把握できるようになり、指導に生かされた。教室も広く使うことができ、ゆとりある教室経営ができた。[T県の「小学校1年生支援事業」]によって1年生時に]大規模クラスへのTT加配により二人の目で子ども達を見ることができた点はとてもよかったが、しかし現在の形[少人数クラス]の方がより良い。(学校No.1, 2年生, 持ち上がり)」「一人一人に対応することが可能。(学校No.2, 3年生, 校内異動)」「担任の心のゆとりを生み、子ども一人一人に十分対応でき、子ども達が安心して学級を作ることができると思う。特に最近、不登校など心の問題を持つ子どもが多く(問題が表面に出ていないが、何か心に問題を持つ子がとても増えている)、その子ども達にゆっくりとかかわることができ、問題解決につながっていくと思う。子どもの思いを聞いてやったり、一緒に遊んだりすることによって、心がひらかれ、担任との関係もうまくつながっていく。(学校No.3, 3年生, 校内異動)」「テストの採点が楽になり、一人一人を見る余裕ができた。2クラスになり、学年担任団としての学習が組める。(学校No.4, 3年生, 校外異動)」「学習中の子どもの思考過程をとらえやすい。担任の心のゆとりが子どもへの対応や指導に良い影響を与えていると思う。物理的な時間の確保を可能にすることで、精神衛生上にも大変良い。(学校No.5, 3年生, 校内異動)」「落ち着いて子どもと接することができるようになった。一人一人の話をじっくり聞くことや、個に応じた対応ができるようになり、子どもと良い人間関係を築けたと思う。雑務が減った。集金・テストの採点処理・掲示物作成等の仕事が減り、その分子どもと向き合えるようになった。(学校No.6, 4年生, 持ち上がり)」「学級事務、児童とのかかわりなど全てが半分になったことにより、児童一人一人にゆとりを持って接することができるようになった。児童にかかわる時間が増えた分だけ、児童理解を深めることができるようになった。保護者と担任、保護者間の連絡が密になり、学級経営に大きく役に立った。(学校No.7, 4年生, 校内異動)」「一人一人の顔が見えるようになった。ゆとりが出てきた。(学校No.8, 4年生, 持ち上がり)」「採点・ノート点検などの事務的作業が細かいところまでできるようになった。(学校No.9, 5年生, 校内異動)」「一人一人に目が届き易くなった(学習面、生活面及び精神的側面)。採点・点検等の学級事務がやり易くなった。学級での活動の計画・実行が容易になった。(学校No.10, 5年生, 校内異動)」という記述であった。時間的・精神的などの様々な「ゆとり」が生じることによって、学習指導・生活指導・子ども理解などにおける良い影響が記述されていた。

学級減少＝規模拡大校では、「学級全体をなかなかまとめにくい。学級崩壊等の大きな原因になる。事務処理が非常に大変で何かを積極的にしようという意欲が薄れてくる。一人一人にきめ細かい指導ができにくい。担任にとって、これだけ負担なことはない。(学校No11, 3年生, 校内異動)」 「日々の生活で全ての子の提出物の処理などに時間がかかるために、徹底した指導ができにくい。見てもらえない不満を持つ子や親がいる。[一方で,] 中学年になるとリーダー性のある子が育ち、中心に立てるようになり、担任を助けてくれる。多人数の学級では、リーダー性が良く育つ。(学校No12, 4年生, 持ち上がり)」 「丸つけなど時間が非常にかかり、個々の児童とゆっくり話す時間が作れない。人数が増えればトラブルも増えるが、そのトラブルが学級全体の問題と感じられない。(学校No13, 5年生, 校内異動)」 「一人一人に目がなかなか行き届かない。学級をまとめるのに苦労する。(学校No14, 6年生, 持ち上がり)」 という記述であった。学級事務の負担量が増えたこと等から来る困難面がうかがえたが、一方で集団が大きくなったメリットにも言及が見られた。

(iv) 自由記述—学年経営への影響

学年経営への影響に関して、学級増加＝規模縮小校では、「校外に出かける学習などの際、役割分担や協力などで、単学級ではできにくい単元の構成を行うことができた。また、能力別に指導した方が効果的と思われるような学習、たとえば水泳指導などの際にも、安全でより良い指導ができた。児童理解・生徒指導などでも、多様な見方ができるようになった。(学校No1, 1→2学級)」 「落ち着いてくる(生活面)。学習面でも一人ずつの力にあった指導ができる。(学校No2, 2→3学級)」 「学年担任団の人数が増えることにより、学年の事務的な内容を分けて受け持つことができ、そのために時間的ゆとりが生まれる。さまざまな活動・学習を実践するにあたって、多くのアイデアが出され、より楽しく生き生きした活動ができる。学年団でTTを組むことができ、学習活動がより広がっていく。子ども達の課題に応じた支援がよりしやすい。複数の担任で相談しながら学年経営をすすめることができ、一人で問題を悩み、抱え込んでしまうことが少ない。担任の精神的負担も少なくなるように思う。(学校No3, 1→2学級)」 「担任が多くなることで、総合学習への取り組みが幅広くなり、子ども達への個の指導・評価がたやすくなった。(学校No4, 1→2学級)」 「まず、複数の人間の考えや意見により、よりよい案が立てられる。一方的で偏った考え方や見方になることを防ぐことが可能。複数の目で子どもを見守っているという事実が子ども達的情绪も安定させていると思う。(学校No5, 1→2学級)」 「子どもを多面的に見ることができるようになった。一人で見るとどうしても一面的な見方しかできないが、複数で見るとその分違った見方ができ、子どもにも良い影響があったと感じている。(学校No6, 1→2学級)」 「複数の教員が違う視点で児童を見つめることにより、多角的に児童理解を深められるようになった。学年で相談し合える教員がいることは心強い。また、仕事を分担して行えることに加えて、総合的な学習などの取り組みについては学年TTで行うことができ、非常に良かった。(学校No7, 1→2学級)」 「一人あたりの役割分担が少なくなった。楽になった。人数が増えることで、それぞれの得意分野を生かして協力することができる。[一方で,] 共通理解すべきことが徹底しないことがある。(学校No8, 2→3学級)」 「担任個々の個性がより発揮しやすい。(学校No9, 2→3学級)」 「学年の仕事(特に事務的な面)を分担でき、時間にゆとりができた。各担任の得意分野を前面に出すことでお互いの経営のフォローができた。[一方で,] 学年全体で歩調を合わせる為の話し合いの時間が必要となり、急な計画変更が難しくなった。小回りがきかないことも稀ではあるがある。(学校No10, 1→2学級)」 という記述であった。学年担任団の人数が増えることによって、複数の目による子ども理解、事務・校務の分担、精神的

ゆとりなど、学年経営にも良い影響が及んでいることがうかがえた。一方で、学級数の増加により担任団の連絡調整に関する苦勞もうかがえた。

学級減少＝規模拡大校では、「学年1学級の為、全て自分で処理している。そのため、負担がかなり大きく、新しく何かを始めようという気が全く起こらない。(学校No.11, 2→1学級)」 「3クラスから2クラスになったために、学年TTなどで見えない子どもが出てくる。[一方で、]お互いによい面を出そうとしており、助け合う学年団となっていていいと思う。(学校No.12, 3→2学級)」 「単学級になってしまったので、相談する相手がいない。全てを自分一人でやらないといけないので、仕事が増える。(学校No.13, 2→1学級)」 「一人でいろいろな行事をまわすのが大変。大きな行事が次々に回ってきて、6年生は特に大変。(学校No.14, 2→1学級)」 という記述であった。事務や分掌等の負担の増加が多く指摘されていた。特に、単級学年になってしまった場合の困難が目立った。

3) 適正な学級規模及び増加教員の活用法（設問C）

調査では、現在の学級規模への意識、適正な学級規模及び増加教員の活用法についても尋ねた(表3)。

まず、「現在担任している学年の学級規模についてどのように感じているか」を、「1. 小さい, 2. やや小さい, 3. ちょうどよい, 4. やや大きい, 5. 大きい」の5段階選択で尋ねた。その結果、「ちょうどよい」(表3では○表示)が8校(回答のあった14校の57.1%), 「やや大きい」(や大)が2校(14.3%), 「大きい」(大)が3校(21.4%)であった。学級減少＝規模拡大校4校の内、3校が「大きい」, 1校が「やや大きい」と回答しており、現状が38～39.5人の学級では「ちょうどよい」の回答は見られなかった。一方、学級増加＝規模縮小校では、学校No.5(現状は20.5人, 3年生)の「やや小さい」, 学校No.10(現状は21人, 5年生)の「やや大きい」を除いて、10校中8校が「ちょうどよい」(現状は20.5～28人)と答えていた。

次に、「現在担任している学年について適正な学級規模はどの程度だと思いか」を、「1. 10人以下, 2. 11～15人, 3. 16～20人, 4. 21～25人, 5. 26～30人, 6. 31～35人, 7. 36～40人」の7段階選択で尋ねた。その結果、14校中13校(92.9%)が30人以下学級の要求であった。具体的には、「11～15人」が1校(7.1%), 「16～20人」が4校(28.6%), 「21～25人」が5校(35.7%), 「26～30人」が3校(21.4%)であり、学級減少＝規模拡大校である学校No.13の1校(7.1%)のみが「31～35人」であった。

最後に、「仮に貴方の学年に教員が1人増員になるとしたら、どのように活用するか」を、「1. どちらかと言えば、学級分割をして少人数学級にしたい。2. どちらかと言えば、このままの学級数を維持して、増員された教員の入り込みによってティーム・ティーチング(TT法)を進めたい。3. 教科や学習課題に応じて、学級分割とTT法の双方を組み合わせて活用したい。」の3選択肢から1

表3. 適正な学級規模及び増加教員の活用法(1999/2000)

区 分	学級増加＝規模縮小校										学級減少＝規模拡大校				
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	
学校番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	
2000年度学年 持ち上がり担任	○	△	△	×	△	○	△	○	△	△	△	○	△	○	
学級増減状況(学級)	1→②	2→③	1→②	1→②	1→②	1→②	1→②	2→③	2→③	2→③	1→②	2→①	3→②	2→①	2→①
2000年度学級規模(人)	21.5	27.3	21.5	20.5	20.5	21	20.5	27	28	21	39	39.5	38	38	
現在の学級規模	○	○	○	○	や小	○	○	○	○	や大	大	大	や大	大	
適正な学級規模(人)	16-20	21-25	16-20	21-25	26-30	16-20	21-25	26-30	21-25	11-15	16-20	26-30	31-35	21-25	
増加教員の活用法	分割	分割	併用	TT	併用	TT	併用	分割	分割	併用	分割	分割	TT	分割	

つを選んでもらった。その結果、「学級分割（少人数学級化）」が7校（50.0%）、「TT法」が3校（21.4%）、「双方の併用」が4校（28.6%）であった。学級減少＝規模拡大校の4校は、「TT法」の1校を除いて3校が「学級分割」の希望であった。また、現状を「ちょうどよい」と感じている学校が多かった学級増加＝規模縮小校の10校でも、同学年3学級（児童81～84人）で1学級規模が27～28人の全3校をはじめとして、さらなる「学級分割」の希望が4校あった（他に「双方の併用」が4校、「TT法」が2校）。

3つの項目についての自由記述を見ると、学級増加＝規模縮小校では、「○：小さいと感じるときと大きいと感じるとき両方がある。16～20人：個別指導が必要な子どもが数名あるので。分割：3の方式〔双方の併用〕は理想的であるが、教師間の話し合い、計画などに時間がかかりすぎ、現段階ではとても無理があるように思う。また、担任と子どもの人間的なつながりも大切にしたい。今の学年なら1〔学級分割〕、3年生に上がるとすれば3〔双方の併用〕。（学校No.1、2年生、2000年度学級規模21.5人）」「○：子ども達を把握しやすい。21～25人：もう少し少なくなるともっと良い（22人の経験あり）。分割：そのような人数なら経営しやすい。（学校No.2、3年生、27.3人、同学年3学級82人）」「○：今よりも少なくなると、学級の活気がなくなってしまうかもしれない。体育などのゲームをする時、面白さが減ってしまう。16～20人：学習の中で一人一人に対応していくのに、20人までが限度ではないかと思う。それ以上になると対応できないかも（特に下学年では）。併用：42人の子どもを3クラスにすると1クラス14人ぐらいになり、それでは人数が少なすぎるように思う。総合的な学習などに対応するために、自由な枠組みが必要だと思う。（学校No.3、3年生、21.5人）」「○：一人一人を見るにはちょうどよい。21～25人：同前。TT：無記入（学校No.4、3年生、20.5人）」「や小：もう少しいてもよいと思う。意見交換など活発化し、多様化すると思う。26～30人：30人までだと思う。学級事務も繁雑になってくる。特に36人以上は子どもの実態も掌握しにくい。併用：算数などで到達度により習熟別指導したり、多様なパターンが考えられるから。少なすぎると学級としての機能が果たせない。（学校No.5、3年生、20.5人）」「○：多すぎては子ども達一人一人に目が行き届かないし、少なすぎても子ども達の間関係が固定化してしまい、変化しにくい。20人程度が一番良いように思う。16～20人：生徒指導上、難しい児童があり、人数が多くてはクラスが落ち着かなくなる。TT：現在の1クラスは20人くらいなのでちょうど良いと感じている。もう一人増員になるとしたら、TTで学力向上をめざしたい。（学校No.6、4年生、21人）」「○：学年単学級で20人程度は少ないと思うが、2学級なので1学級の人数としてはちょうど良いと思う。21～25人：個人的なかかわりが十分にもてる。併用：達成度別や興味別などのコース別学習をして、効果的に学習を進めたい。（学校No.7、4年生、20.5人）」「○：教室に座っている子ども達の顔が一目で見渡せる。26～30人：同前。分割：適正な学級規模になる。（学校No.8、4年生、27人、同学年3学級84人）」「○：やや大きい感もあるが、これくらいがちょうど良いかと思われる。21～26人：21人未満では少ない。26人以上となると、担任の目が一人一人の児童に届きにくくなる。分割：適正と考える21～22人の学級編制となるから。（学校No.9、5年生、28人、同学年3学級84人）」「や大：規模としては12～15人くらいが丁度良く、学習での関わりも発言も保障できと思う。11～15人：現在20名の学級であるが、近年、多動傾向の児童が増加し、その言動や種類が多様化し、対応に苦慮する場合がある。併用：学年全体で動いた場合はTT様に、課題によっては能力別・発達段階別に扱った方が効果的である。（学校No.10、5年生、21人）」という記述であった。

学級減少＝規模拡大校では、「大：40人近くおり、他学級の約2倍である。色々な面で負担を感じるため。16～20人：あまり多すぎても少なすぎてもいけない。これくらいが一人一人に担任の指導

が十分行き届くのではないかと思うから。分割：特定の教科のみのTTでは、担任の負担が変わらない。分割することが望ましい。(学校No.11, 3年生, 39人)「大：人数が多すぎ。手も届かず、目も届かないような気がする。26～30人：ちょうどよい。分割：小学校の担任は学習だけではないので、クラスをはっきりと分けないと負担は大きい。学習以外の活動も伸び伸びさせるには、40人対1人の教員では難しい。現在、子ども達は伸び伸びと育っているために、教員はますます個に対応するために苦労します。(学校No.12, 4年生, 39.5人)「や大：机間巡視をする間もない。31～35人：高学年は30人くらいの方が活動が盛り上がる（低学年だったら、少人数でじっくり向き合った方がいいと思う）。TT：やっと一年かけてみんなが同じ方向を向ける学級にしてきたのに、今さらクラスを分けたくない。が、仕事は減らしたい。(学校No.13, 5年生, 38人)「大：人数が多く、学習指導的にも、生徒指導的にも難しい。21～25人：20人以下だと少し少なく、活動に幅が持てない。分割：生徒指導的にやはり2学級にすべき。(学校No.14, 6年生, 38人)」という記述であった。

4) 40人学級編制を改善充実する方策についての自由記述

2001年度から始まる主要教科での「少人数授業」施策ともかかわって、40人学級編制を改善充実する方策について自由記述を求めた。

まず、少人数学級化を求める声が多数あった。具体的には、「主要教科だけ少人数授業ができて、学級の荒れや不登校などの問題の基本的な解決にはつながらない。一番の問題は学級としての集団がどう安定するか、子ども達が安心した場所になるかということだと思う。少人数授業はそれなりの効果はあると思うが、やはり少人数学級の実施が本当に、本当に、本当に望まれる。また、40人学級制で学級数が少ない（学年単学級）学校では、自分の学級のことで手一杯な上に、教員数が少ないために校務分掌も多くなり、本当に心身ともに疲れているのが現状である。(学校No.3, 3年生)「35人学級と言われているが、25人学級でもよいと思う。(学校No.4, 3年生)「やはり35人学級を早期に実現してほしい。今の学年も12年度末には1名転出のために再び1クラスになる予定。一人の人間にも限界があると思う（仕事と家庭の両方があるため）。自ずと児童一人当たりへのサービス(?)の量は減るだろう。(学校No.5, 3年生)「40人学級制を見直し、35人学級制を早期に実現すべきと考える。主要教科での少人数授業となると、その際のグループ編成の方法についての問題が生ずると考える。従って、学級分割をして、少人数学級にしたい。(学校No.9, 5年生)「40人学級制は限界を過ぎ過ぎており、制度を改めてもらいたい。現に、ベテラン教師の学級でも様々な問題が起こっていることから、もはや限界である。教育が大きく変化していく中で、ここが変化しなければ、何も変化していかないのではないかと思う。(学校No.11, 3年生)「やはり少人数で学習を進められることを望んでいる。30人学級が実現するとありがたい。(学校No.14, 6年生)」という記述がみられた。関連して、「40人学級では多すぎる。30人学級の早期実現と、25～30人では学校裁量による単学級か2学級かを選択できるような方策を取るべきだと思う。(学校No.10, 5年生)」という、現場裁量を加味する方向での意見もみられた。

学年による違いを指摘したものとして、「小学校というひとくくりで学級規模を論ずるところに無理があるのではないか。低・中・高学年それぞれの適正というものがあると思う。特に、低学年では30人をこえる学級の指導は大変だと感じている。主要教科での少人数授業は低学年にはそぐわないと思う。担任との信頼感（子ども・保護者も）なくして、指導はできない。入り込みによるTT方式ではなく、少人数学級を実現したい（低学年には）。高学年には、『学級分割とTTの双方の併用』

がよいと考える。(学校No.1, 2年生)」という記述がみられた。類似した意見として、「できるだけ一人一人の学力に応じて、どの子も『分かった』と思えるような授業にしていきたいと思っている。そのために、40人を学力に応じていくつかに分けてグループを作り、グループごとに工夫した分かり易い授業を組み立てていくのが良いと思う。(学校No.6, 4年生)」という4年生担任の声もあった。

また、「常時、副担任があればと思う。(学校No.2, 3年生)」という副担任制を求める意見、「40人の学級自体は悪くないと思うが、一人担任にかかる作業が多すぎる。そこで、家庭科・音楽・理科など専科にし、今3時間しかない空き時間を5～6時間にしてもらおうと、ゆとりを持って子どもに接していくことができると思う。(学校No.13, 5年生)」という専科教員方式の拡充を望む声もあった。

4. 考 察

第Ⅰ・Ⅱ報においても、「適正な学級規模」を小学校として一律に論じるのではなく、より多様な視点が必要ではないかと思わせる自由記述意見が出されていた。今回は、特に「学年の違い」及び「個に応じた配慮」に焦点をあてて、考察する。

1) 「学年の違い」による「適正な学級規模」論議

学校No.1の自由記述回答に示された「低・中・高学年それぞれの適正というものがある」との意見は、学級編制に際して「学年の違い」による配慮を加味すべき方向として注目される。学校No.1の回答者は、1999年度に1年生38人学級を補助講師(T県の「小学校1年生支援事業」による1年生の36人以上学級への加配)の助けを得て受け持った後に、引き続いて学年を持ち上がった2000年度は学級増によって43人を2担任で担当している。現任校の勤務年数は8年目で、40歳代の女性教諭である。その意見を要約すると、まず「低学年の場合は、大規模クラスの下でのTT加配や少人数授業はそぐわず、16～20人程度の小規模学級が望ましい。」というもので、その理由として「担任と子どもとの人間的つながり」「担任と子ども・保護者との信頼感」の重視や形成を挙げている。これに対して、中・高学年ではもう少し大きめのクラスでも可能であり、「教科や学習課題に応じて、学級分割とTTの双方を組み合わせる方式」がよいと考えている。

学校No.12(4年生)の自由記述回答には、「中学年になるとリーダー性のある子が育つ」「多人数の学級ではリーダー性がよく育つ」と述べられており、関連して興味深い。回答したのは、1999年度に3年生84人を3学級・3担任で担当した後、2000年度は持ち上がりで4年生79人を2学級・2担任で担当している現任校6年目の40歳代の男性教諭である。しかし、この教諭は中学年における多人数学級の効用を認めつつも、現在担任している4学年の適正規模を「26～30人」と回答しており、さすがに「40人」の規模は「人数が多すぎ、手も届かず、目も届かない」と訴えている。そして、「学習以外の活動も伸び伸びさせる」には、40人学級では困難であるとしている。

また、学校No.13(5年生)の30歳代の女性教諭は、「高学年は30人くらいの方が、活動が盛り上がる」「低学年だったら、少人数でじっくり向き合った方がいい」と述べている。そして、学級担任にかかる負担を軽減して空き時間を確保する意味でも、家庭科・音楽・理科などの専科教員制の拡充を提案している。

これらをまとめると、「適正な学級規模」として、低学年では「20人程度」の少人数学級を基本に比較的集団を固定した学級経営を行い、中・高学年になると「30人程度」の規模にした上で更に少人数授業やTT法、専科教員制などを加味する柔軟な学級経営・学年経営を導入する方向が仮説的に浮かび上がる。そして、「適正な学年規模」としては、学年TTや課題別の学習グループの編成を可能にし、子ども達が切磋琢磨するダイナミズムも保障する意味から、単学級ではなく2～3学級の規模が想定されよう。

標準法は、これまでも、小学校に関して第1年生を含む複式編制についてはより少人数にする配慮を採ってきた。加えて、2001年度改正標準法の下で各自治体が国の標準を下回る学級編制を行うことができるようになり、小学校低学年を少人数編制したり、教員加配を行うところが幾つも生まれている⁽²⁾。低学年と中・高学年との違いを考慮した学級編制や学級経営・学年経営の在り方の解明は、今後の大きな検討課題の一つであろう。

2) 「個に応じた配慮」による「適正な学級規模」論議

さらに、学校No.3（3年生、40歳代の女性教諭）は、少人数だと「心の問題を持つ子ども達にゆっくりかかわることができ、問題解決につながっていく」と述べており、「16～20人」が適正な学級規模としている。同様に、学校No.6（4年生、40歳代の男性教師）は「生徒指導上、難しい児童」の存在を、学校No.10（5年生、40歳代の男性教諭）は「多動傾向の児童」の増加を挙げて、少人数学級（学校No.6は16～20人学級、学校No.10は11～15人学級）の必要性を述べている。低学年のみならず中・高学年においても、こうした特別な配慮の必要な児童が存在すれば、学級規模を「20人以下」に少人数化することが検討課題となる。

省庁再編により、2001年1月に文部科学省が発足したが、その際に従来の「特殊教育」・障害児教育に加えて通常学級で学ぶ学習障害（LD）児、注意欠陥／多動性障害（AD/HD）児、高機能自閉症児等への特別な配慮・支援も視野に入れた「特別支援教育課」が設けられた。さらには学習困難児、不登校児、外国人子弟など、特別な教育的ニーズを有する子ども達を対象とした「特別ニーズ教育」の拡充整備に向けた学級編制及び学級経営・学年経営の在り方の解明も、もう一つの大きな検討課題であろう⁽³⁾。例えば、2001年改正の義務標準法第15条第2号は「教育上特別の配慮を必要とする児童又は生徒に対する特別の指導」（具体的には同施行令第5条第2項による障害児への通級指導、不登校児への適応指導、外国人子弟等への日本語指導、病児への健康回復指導、肥満児等への食生活指導）を、高校標準法第22条の2第3号は「教育上特別の配慮を必要とする生徒に対する特別の指導」（具体的には同施行令第5条第3項による退学防止の適応指導、外国人生徒等への日本語指導、病者への健康回復指導）を規定している⁽⁴⁾が、教職員を加配する「配置改善」ととどめずに、学級編制を改める「編制改善」に踏み込んで検討を進めることが挙げられる。

さらに、学校No.11（3年生、30歳代の男性教諭）の自由記述回答に示された「積極的な子どもにとっては、多人数の方が競争心が芽生え、効果的かもしれない。消極的な子どもにとっては、多人数だと益々自分を表現していくことが困難になり、何かと負担になることが多くなる。」との意見も注目される。すなわち、中・高学年になって多人数の中で「リーダー性」が育ったり、「活動が盛り上がる」と言っても、例えば「積極性・消極性の違い」への配慮が求められるからである。同様に、学校No.13（5年生、30歳代の女性教諭）は、多人数だと「積極的な子はよいが、そうでない子は別に自分が言わなくても、やらなくてもという受け身な姿勢になる。」と述べている。また、学校No.1

(2年生, 40歳代の女性教諭)は, 少人数になって「学力面で中間層にあたる子ども達の実態がよく把握できるようになった」と述べている。逆に言えば, 多人数学級では, いわゆる「できる子・できない子」ではなく, 比較的目立たない「中間層」が埋もれていることになる。学校No.5 (3年生, 30歳代の女性教諭)は, 「学習中の子どもの思考過程をとらえやすい」ことを少人数学級の長所として挙げている。「特別支援教育」「特別ニーズ教育」までを必要としない場合でも, 個に応じた配慮がなされ, 思考過程まで踏み込んだ児童理解が可能な学級編制(編成)や学級経営・学年経営の在り方が追究されるべきであろう。

追記: 本報告は, 科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))・課題番号13610298「義務標準法第7次改善計画に係る地方教育施策の研究-『特別支援教育』の進展過程-」(研究代表者・渡部昭男)における研究成果の一部である。

謝辞: 調査に御協力いただきました皆様方に対して, ここに記して感謝申し上げます。

《注》

- (1) 渡部昭男(1999)「学年進行時の学級数増減に伴う学級規模の変化とその影響に関する調査研究」『学校・学級の適正編制に関する総合的研究 第2次中間報告書』(平成9~11年度 文部省科学研究費補助金基盤研究A(1)課題番号09301011 研究代表者・桑原敏明), pp.18-25。同(2000)「学年進行時の学級数増減に伴う学級規模の変化とその影響に関する調査研究(第Ⅱ報)」『鳥取大学教育地域科学部紀要(教育・人文科学)』第2巻第1号, pp.21-37。
- (2) 文部科学省ホームページ (<http://www.mext.go.jp>) 報道発表一覧「平成13年度に公立小中学校で少人数指導に取り組む学校に教員を配置する都道府県の方針等について(2001年5月11日)」「平成13年度に学級編制の弾力化を実施する都道府県状況について(2001年5月11日)」。新聞報道としては, 日本教育新聞2001年3月9日付け記事「小・中学校定数改善計画 都道府県教委の方針 本社調べ10県が小・低学年で小規模化」, 同2001年5月18日付け記事「第7次定数改善計画で教委の対応 文科省まとめ 10府県で学級編制弾力化」, 日本海新聞2001年8月25日付け記事「埼玉・志木市の小学校25人学級実現へ」など。
- (3) 21世紀の特殊教育の在り方に関する調査研究協力者会議(2001)「21世紀の特殊教育の在り方についてー一人一人のニーズに応じた特別な支援の在り方についてー(最終報告)」(文部科学省ホームページ掲載, または『季刊 特別支援教育』第1号, 東洋館出版, 所収)。渡部昭男(2001)「特別なニーズをもつ子どもの学習権」『講座 現代教育法』第2巻, 三省堂, pp.86-100。特別なニーズ教育とインテグレーション学会(2001)『SNEジャーナル』第7巻第1号(特集・討論「21世紀の特殊教育の在り方」最終報告), 文理閣。
- (4) 渡部昭男(2001)「学級編制(1)×(2)×(3)」『管理職ニュー・コンセンサス第3巻 よくわかる校長・教頭最新学校運営実務』教育開発研究所, pp.43-48。

